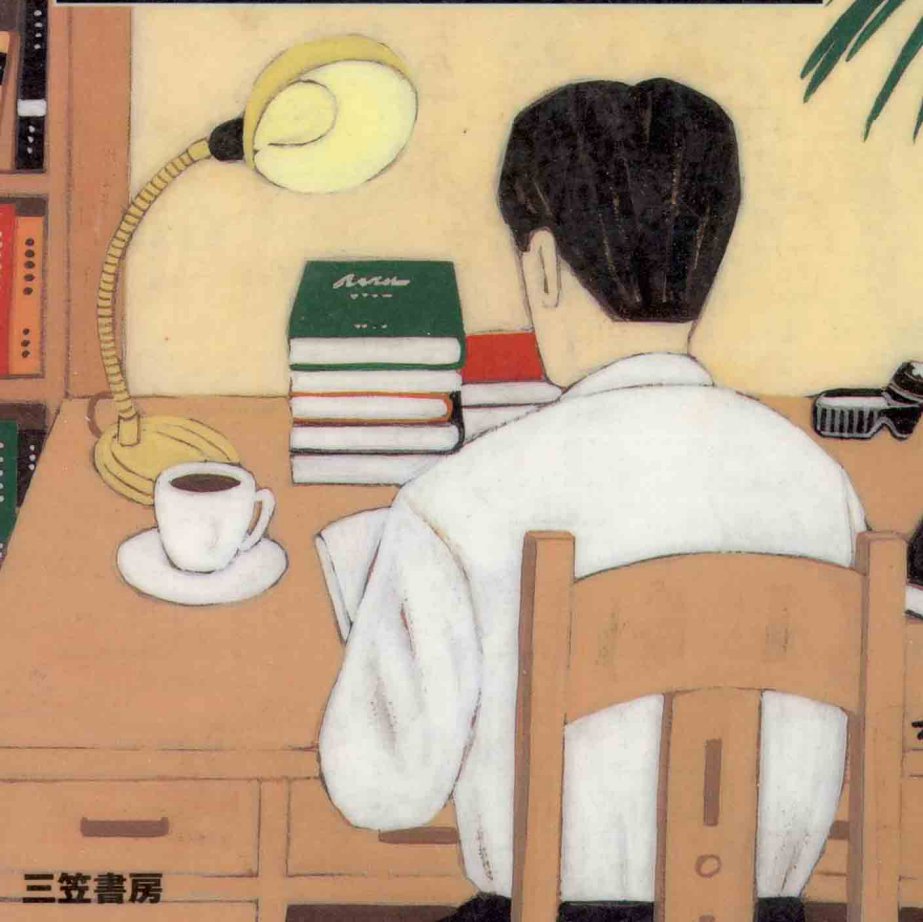


朝日新聞編集局顧問

くつれだ 轡田隆史

「考える力」を つける本 3

これが「思考」を強化する最終ステップ



「考える力」をつける本 3

著 者 轡田隆史

発行者 押鐘富士雄

発行所 株式会社三笠書房

〒112-0004 東京都文京区後楽2-23-7

電話 03-3814-1161〈営業部〉

03-3814-1181〈編集部〉

振替 00130-8-22096

印刷 誠宏印刷 製本 宮田製本

© Takafumi Kutsuwada 1998, Printed and bound in Japan

ISBN4-8379-1761-5 C0030

編集責任者 迫 猛 製作責任者 中村利夫

落丁・乱丁はお取替えいたします。

* 定価・発行日はカバーに表示してあります。

朝日新聞編集局顧問

くつわ だ
史隆田轡

「考える力」を つける本3

三笠書房

江苏工业学院图书馆
藏书章



はじめに

あとは、空寂。

——シェイクスピア『ハムレット』第五幕第二場

『考える力』をつける本』が、これで三冊目になった。

「三部作」などと生意気なことをいうつもりはない。②は、①についての自己点検と反省をこめて、「考える力」をつけるための方法と、ものの見方、考え方を、さらに広げたりもりだった。

今度は、先の二冊を踏まえて、一層の飛躍を元氣よく試みたつもり。意欲が空回りしていなければいいのだけれど。三冊はつながっているけれど、同時に、それぞれ独立した一冊ずつといってもいい。

もともと、「考える」という行為に、「切れ目」も終点もないのだから。「生きる」とは、人生の最後のときまで、あらゆる場面で「考えつづける」ことなのだろう。

今のわたしは、「終わりなき思考の旅」の、最初の第一歩である「始まり」の部分の「終わり」。そんな気分なのである。

そのせいか、「考える力」の「能力」というものは、だれにだって平等に与えられているはずであることに、これまで以上にこころ動かされている。

もしも人によって「差」があるとするならば、それは「能力」そのものの「差」ではなくて、次のような「差」なのである。

一、「能力」の使い方に、多少の、巧い、下手があること。

二、だれにも同じように「能力」があるのに、自分には「ない」、と勝手に思い込んだり、思い込まされてしまっている、まことにつまらない「思い込み」の有無の差。

多くの人たちが、せっかくの「思考能力」を、この二点のような事情によって、ムダに費やしているのではなからうか。

「思考」とは、孤の作業であるのと同時に共同の作業なのである。

自分自身と、そして歴史や伝統や、今とともに生きている人びととの、絶えざる対話によって、「思考」は深まり、「考える力」は鍛えられ、育つてゆく。

シンポジウムが盛んに開かれている。ギリシャ語からきたこの言葉の原意は、「みんなでいっしょに飲んで歓談すること」だ。

現代では、「飲む」のはともかくとして、大いに「歓談」しようというのがシンポジウムのねらい。「対話」で、お互いに「思考」を深めてゆこうというわけだ。

わが得意の我田引水でいうなら、たった一人で行なう、「このころのなかのシンポジウム」があってもいいし、ほんの数人のそれがあってもいい。不肖、このわたしは、ギリシャ風に「いっしょに飲んで歓談」専門でやってきたけれど、もちろん、飲むもよし、飲まぬもよし。

パーティーの司会の、お時間の許す限りご歓談下さいという、例の「中締め」のあいさつではないが、人生の時間の許す限りつづける「歓談」こそ、「思考能力」を豊かにしてくれる道だろう。

ゆつたりと、愉快に、元氣よく「対話」をつづけていれば、だれにもある「考える力」が、はつらつと躍動して、きっと何かが生まれるにちがいない。

「考える力」をつける本3冊もくじ

はじめに 3

プロローグ——「考える力」の源は「対話」にある！ 15

Part 1

発想の技術

——「大切なこと」を見逃さない目

何かを前提とした「見方」をしていないか？ 22

「自分」を主語にして考える 22

自分の力を信じること、これが基本である 26

司馬遼太郎さんが貫いた「私くさい話し方」の哲学 28

たった一言で説明しようとしてはならない 30

迷ったときは「当たり前のこと」に返れ 33

素人の「ものの見方」が説得力をもつとき 33

「当たり前」がきちんと実行できれば、それがすごいこと 40

一日の行動に「句読点」を打つ生き方 42

「楽しみの先送り」が、人生を豊かにする！ 46

余裕のある考え方で、発想の「きっかけ」をつかむ 46

味わうことの愉しさ——「完全無欠」は退屈である 50

「見地味なこと」こそ、感動の素がある！ 53

下手なほうが、美技を演じる機会が多い！ 53

「平凡」の中に輝くものを見つける目 56

「満点主義」は貧弱な発想である 60

どんどん覚えて、どんどん忘れるくらいがちょうどいい 60

素直に疑問を抱くことの大切さ 66

Part 2

自分との対話

「思考する能力」を高める

「思考力」は、この「想像力」に通ずる 72

「このころの中に一本の木を育てる」ということ 72

「基本」の積み重ねが、たった一度の大きな「奇跡」を生む 78

市井に名言あり——ざつくばらんでウンチクに富む、こんな言葉
わかりやすいことほど、疑え 87

「もっともらしい話」ほど怪しい 87

「儲ける」「大儲け」「ボロ儲け」について考える 89

人間、わかりにくい部分に出くわすと、自分の都合で考える 93
「考える座標軸」を、どくに置くのか？ 95

意識して「姿勢を正す」ことから生まれてくるもの 95

自分という人間の「中心」をはつきりととる 99

「考える力」とは、「構成を出来るだけ簡単に」すること

Part 3

歴史との対話

——自分の「考え方」に、どう利用できるか？

歴史と対面するということ

140

自分にとっての歴史を、どう考えればいいのか？

140

歴史とは「現在と過去との尽きない対話」

145

この自問自答を繰り返そう

107

手本どおりになぞっても、自分なりの味は出る

109

「答え」を発見できる人、できない人

113

問いかける力、答えを発見する力

113

むずかしい問題を「やさしく」考えてみる

120

「怠け者」は見込みがある

123

「沈黙」のない音楽のような毎日になっていないか？

127

怠けたあとに、大きなひらめきがやってくる！

130

* 「対話」を楽しむための本

135

想像する力を、歴史にもぶつけよう

151

「過去との対話」から学べること

155

自分の問題として歴史を引き受けているか

155

歴史の中にある「無数の伝記」を読む

160

年表や歴史書の行間に、等身大の「分身」を発見する

161

歴史上の人物に、何を学ぶか

166

「威張る、ふんぞり返る」人は、歴史に学べない

166

「人格」「人柄」の問題について考える

173

申し訳ないが、平賀源内を利用させてもらおう

178

「我が道」を、どこまで貫けるか——藤原定家十九歳の決心

181

「自分の力」が目覚めるとき

185

大きな失敗ができるというのも「能力」のうち

185

リアルに社会を見る目がなければ、笑いは生まれない

187

「思い出」を歴史の問題として語ろう

192

こんなときこそ、徹底的に「対話」を繰り返すチャンス

196

Part 4

他者との対話

——相手の「言葉」の中に、何を発見するか？

「考える力」を強化する最終ステップ 200

「話せばわかる」「問答無用」 200

「対話」の出発点——どこまで「私心」を捨てられるか 202

「自分の中の他人」に問いかける 205

「思考能力」は、人に会うことで成長する 209

「対話本」のすすめ——だから、話題が尽きることない！ 209

「その人」に会いに行く前に、何を準備するか？ 212

「自分の考え」は、書いたり、話し合ったりしながら変化してゆく 216

「おしゃべり」の余韻から生まれるもの 219

「議論」の作法——力を合わせて、何ごとかを探求する 222

「考え方」「意見」の違う人に、どう対応するか 227

* 「旅の楽しみ方」 10 力条 233

Part 5

楽しむ道具としての「考える力」

「ものの見方」が変われば、「見える世界」も変わる！

240

オリジナルな「考え」より大切な「先人からの頂きもの」

240

「考える力」は、楽しむためにこそふんだんに使おう！

246

たとえば、その文章を「定義」として読むと……

251

「思いつき」を口にしても、立派な批評になっている！

257

おわりに

264

プロローグ——「考える力」の源は「対話」にある！

冒頭から肩怒らせて自慢するほどのことではないが、わたしは食い意地の張っている点では、人後に落ちない人間である。

「鉄の胃」の持ち主であるという評判もあるけれど、とにかくすぐハラが減るし、ハラが減っていると機嫌が悪くなる。

不機嫌で人に迷惑をかけたくはないから、ハラを満たすために、しょっちゅう、「さあメシ、メシ」と、小声で叫んでしまう。そのたびに、いわれるのだ。

「人の生くるはパンのみによるにあらず」と。

いくらわたしだって、この、「人の生くるはパンのみによるにあらず」は、新約聖書・マタイ伝福音書第四章四節にある言葉であることや、その意味するものぐらひは承知している。そのうえで、こう思うのだ。